

2020 年東京オリンピック開催に向けての一考察

An examination of 2020 Olympic games held in Tokyo

1K07B166-9 早戸 達哉

指導教員 主査 堀野博幸先生 副査 石井昌幸先生

第I章 序論

1. 研究背景と目的

筆者は、2004 年のアテネ五輪において深い感動と勇気もらった。その経緯から、筆者は生きている間にオリンピックを生で見たいと考えている。そのため、2016 年の東京五輪開催に向けて招致活動を行っていた東京が選考から漏れたことは残念なことであった。

しかし、2020 年夏季五輪において、東京は再び五輪開催に向けての意欲をみせている。そこで本研究の目的は、2020 年の東京五輪開催を目指すにあたり、東京の招致活動をより成功させる方策について考察することである。

2. 方法

本研究は、オリンピック、特に、日本におけるオリンピック招致に関する文献や資料、新聞などを使って行い、それらを引用・参考にして行う文献研究とする。また、情報の不足している箇所に関しては、インターネット上の情報を参考にしながら補足を行っていく。

第II章 近代オリンピックの歴史と変遷

1. 近代夏季五輪は、1894 年にフランスのクーベルタンによって発祥され、冬季五輪は 1924 年に始まったとされる。

2. 開催都市の推移を見てみると、1956 年大会以降の夏季五輪は同大陸間で連続して五輪は開催されていない。一方、冬季五輪は、近年の 1992 年と 1994 年にヨーロッパ大陸で連続して開催されているが、それ以後の大会では同大陸間で連続しての冬季五輪は開かれていない。

3. オリンピックの転換期は、政治を利用したベルリン五輪（1936）と商業主義を生んだロサンゼルス五輪（1984）に分けられた。

第III章 日本開催のオリンピック

1. 東京（1964）は、戦後から復興した日本の姿を世界の人に理解してもらうため、そして 1940 年の東京大会（戦争により中止）を返上するためという招致背景を持ち、海外での招致活動、アジア大会での組織運営力に力を注いでいた。（なお、札幌五輪は東京五輪と招致理由が以ているため今回は含まなかった）。

2. 長野（1998）は IOC 委員に対する働きかけ、その中でも当時 IOC 会長であったサラマンチに焦点をあてた招致活動を行っていた。

第IV章 2016 年、五輪立候補都市の招致活動比較

1. 東京は強固な財源やインフラ面で高評価を得ていたが、「なぜ東京でオリンピックを」という招致理由のインパクトが弱かったとされる。

2. 開催都市に選定されたりオデジャネイロは「南米大陸初のオリンピック開催」という命題をかざし、これが IOC 委員に絶大なインパクトを与えたと考えられた。

3. マドリードは、前 IOC 会長であったサラマンチの鶴の一声や欧州票など、IOC 委員との縦横の繋がりの強さをみて取ることができた。

4. シカゴは、オバマ大統領という時の人物を使って招致アピールを行ったが、五輪のテレビ放映権料問題に起因した IOC との摩擦や、アメリカで発生したリーマンショックの影響で財政面の不安が叫ばれたことが痛手になったと考えられた。

第V章 考察

五輪招致において重要となる項目は、1. 五輪開催をその都市で行う理由が明確であるか、2. IOC 委員の信頼を得ているか、3. 開催都市（国）の支持率があるか、4. 経済基盤や競技施設が整っているか、5. 大陸間のローテーション、であると考察された。

そして、東京が 2020 年の五輪開催を目指すにあたって重要となるのは、明確な五輪招致理由を打ち出し、それに付随した国民の支持率を得ること。そして、各 IOC 委員と信頼できる関係づくりをするために、より積極的なアプローチを行うべきであると考察できた。

最後に、オリンピックの開催都市を選定するのは私たちと同じ人間だ。人間には必ず感情というもの存在する。「オリンピックを我が国で開催したい、我が国でのオリンピック開催に賛成だ」という熱く、好意的な情を、今後の招致活動において、IOC 委員の心に強く訴え続けてほしいと願っている。

第VI章 結論

本研究から、2020 年の東京五輪開催に向けて、東京が行うべき課題が考察された。しかし、本研究では他に多くある五輪招致例を相対的に検証、考察することはできなかった。そのため、その点の検証や考察は、これ以降のオリンピック招致活動研究に期待することとする。